論説

隠山部落の三十三体観音像『台座文』調査書

義沖　光

はじめに

浜脇地区の山間部に「隠山」と言う地名の部落がある。平家落ち武者伝説のある部落であるが、もと大分大学名誉教授富来隆著「言葉と生活・文化」によると「隠山」は別府のタタラ地名四つのうちの一つであるという。落ち武者伝説といい、タタラ地名といい、村の興りは相当に古いことが想像できる。

現在の村を貫く道路は明治三十八年から昭和七年までの二十七年間を費やして完成したもので、それ以前の道は道路開削記念碑の言辞を借りれば、「険阪多ク且ツ狭隘ニテ頗ル不便ニシテ多年関係区民ノ最も遺憾トスルトコロナリ」で、牛馬一頭がようやく通れる程度の幅員と、急な坂からなる旧道が長さ二〇〇m程度、山裾の里道として残っている。

本題の三十三体観音像はこの里道沿いにある。

三百六十五年余にわたる篤い信仰心

三十三体の観音像は里道沿いの（当時は本街道であった）岩山をくり抜き祠とし、一体一祠の形式で三十三体の観音様が並んでいる。

第二観音像と第三観音像との間に願施主の石碑があり、「文正元丙戌（ひのえいぬ）　四月吉日　施主　加兵衛　同　村中」とある。文正元年は西暦一四六六年で室町時代中期、銀閣寺造営で知られる足利義政将軍の時代であり、豊後では十五代大友親繁（ちかしげ）が家督を継いだばかりであった。

また第十七番観音像と第十八番観音像との間にも願施主の石碑があり、「天保二辛卯（かのとう）年　西国三十三所　八月大悲日　願主　歌吉　直右ェ門」とある。天保二年は西暦一八三一年であり三十七年後には明治元年を迎えることになる。碑文中の「大悲日」という言葉は大辞典を見ても出てこないので、この言葉は観音菩薩の別名を「大悲菩薩」と言うこと、大悲大慈の心で三十三観音を安置したいと云う悲願を兼ねた造語ではないかと推測される。

この二つの碑文による文正元年から天保二年迄の少なくとも三六五年間、十数世代の長きにわたって営々と仏像を刻み

つづけ祈りつづけたことになる。台座文は西国三十三所の御詠歌であることが分かった。当時の村人の生活レベルがどうであったか、尊像の製作に如何ほどの費用がかかったか等の具体的な事は解らないが、十分な時代考証をしたドラマ等で知る限りでは百姓は豊かではなかったから、この尊像は貧者の一灯にして誠に尊い観音様であると思う。

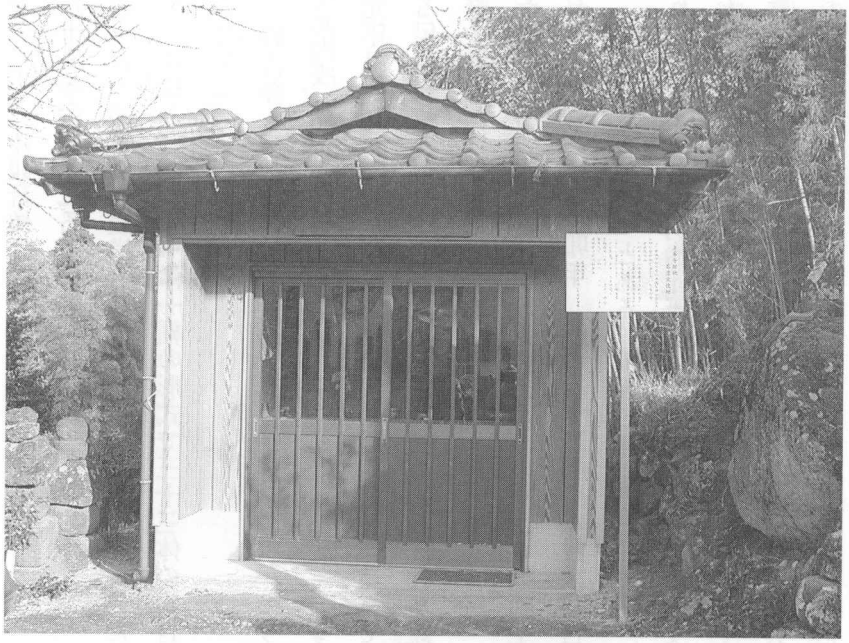
観音信仰と御詠歌について

本題の台座文を報告する前に観音信仰と御詠歌について復習しておきたい。

観音様（正確には観世音菩薩）は、仏陀の教えを広め衆生を様々な苦厄から救い、悟りの彼岸に渡す（済度）役割を担った行者（菩薩）である。この信仰は、仏教伝来（西暦五三八年）と共に日本に伝わり、飛鳥〜奈良〜平安と時代が下るにしたがって、貴賤を問わずその対象を広げた。

隠山三十三体観音像の台座文は主として西国三十三札所の御詠歌であることが確認できた。西国三十三所の観音霊場を「西国三十三札所」と云うが、具体的には畿内を中心に一府七県にまたがる三十三ヶ所の観音様を本尊とする寺（または堂）のことである。

これらの寺（または堂）にはそれぞれの観音様を称える歌があり、すべて五七五七七の短歌形式で一つの寺に一首（例外的に二首）ずつあり、これを御詠歌と呼んでいる。



三十三体観音像近くにある山王社

三十三所の観音信仰はその根底に罪障消滅―この世で犯した罪を消滅して極楽へ往生させていただきたい―という願いがその中心にある。そもそも三十三というのは観音様が衆生済度のためにこの世に示現したまう時のお姿の数であり、三十三霊場はそれをもとに決められたものであるが、その霊場の選定がどのようになされたのかは専門家でも判らないそうである。

三十三観音霊場は全国にあるといっても過言ではない。主なものを列記すると、西国三十三札所、板東三十三札所、秩父三十三札所、津軽三十三札所、最上三十三札所等々北海道、沖縄を除く地域に主なものでも十八の三十三札所がある。

九州には九州西国三十三札所があって福岡県、大分県、佐賀県、熊本県、長崎県にまたがる三十三ヶ所の霊場を巡礼することになる。何故か宮崎県、鹿児島県には霊場が選ばれていない。

別府市最古の古刹といわれる浜脇田の口部落の宝満寺は、九州西国三十三所第七番札所で、大正二年（一九一三）に現在地に移設されたが、それ以前は隠山部落にほど近い場所にありその跡地の一部は今も残っている。

大友氏八代氏時から十代親世の頃は大友氏の勢いが盛んな頃といわれており、宝満寺は大友家の庇護を受けて寺領四百町歩を有し、十二の末坊を持つ堂々たる大寺であったそうで、近在の人々におおいなる影響を与えていたと思われる。それ故に三十三体観音の発心も宝満寺の感化によるものではないかと想定される。

そもそも札所の基盤は平安中期には確立されていたようであるが、一部の修行者（僧）による巡礼が平安―鎌倉―南北朝ごろまで続いており、一般庶民の巡礼が始まるのは室町時代に入ってからと推定されている。一般庶民巡礼草創期に、隠山部落では三十三札所のミニチュアを作り始めたのである。この時期のこの発想は特筆すべき事なのか、それとも彼方此方で創られていたことなのかは分らないが、都から遠く離れた田舎者の発想としてはすばらしいことだと思うのである。

御詠歌について

観音信仰の始まりがハッキリしないのと同じように、御詠歌もほとんど何も分からないそうである。御詠歌が詠まれた時代も作者も極く一部を除いてはほとんどが分からないと云う。

御詠歌は短歌形式をとってはいるが歌といえるほど言葉が

磨かれていない。悪く云えば話し言葉に近くて泥臭い、だから分かりやすいかと云うとそうでもない。言葉のルールを無視して意味の通じないものもある。

それというのも御詠歌は文芸が目的ではなく、観音菩薩の衆生済度の有り難さを身を以て感じとらせるのが目的だからである。御詠歌は求道者をして法悦境に導く有力な手段であったと共に、「巡礼の人長途の労を忘れん為詠歌を詠ず」とその苦行感を軽くしてくれる有り難い歌である。

御詠歌の節は空也上人（九〇三年頃～九七二年頃、平安中期の僧）が自作の歌に調子をつけて歌われたのが多くの人々に歌い継がれ発展して来たものと云われている。高野辰之の「日本歌謡史」によると数ある御詠歌のうち最も愛唱されているのが西国巡礼のものだそうで、九州西国三十三霊場という、いわば地元の御詠歌よりも、都の御詠歌を隠山三十三体観音像に刻んだのはそれだけ西国三十三所に人気があったということだろう。

隠山部落三十三体観音台座文の調査結果

以下は次の要領で記します。（□は不明文字を示す）

↑台座に刻された文字

↑推測される文字

第一番観音像

☆　御詠歌が刻まれておりません。

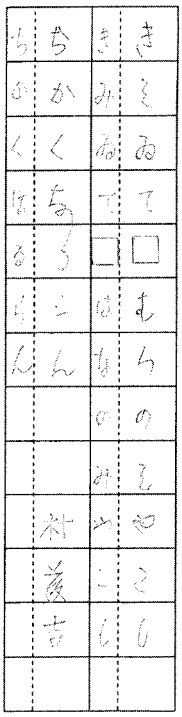
参考；　西国三十三札所　第一番　紀の国　那智山（なちさん）
青岸渡寺（せいがんとじ）

御詠歌

ふだらくや　きしうつなみは　みくまのの
なちのおやまに　ひびくたきつせ

（補陀洛や　岸打つ波は　三熊野の
那智のお山に　響く滝津瀬）

第二番観音像



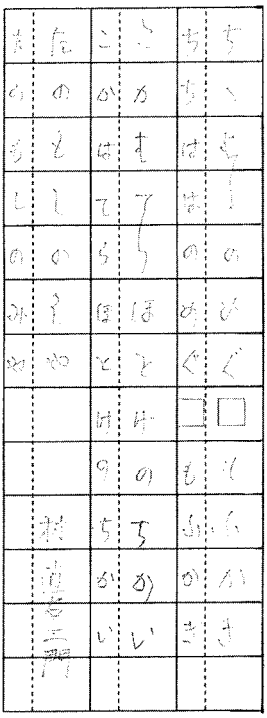
☆　西国三十三札所　第二番　紀の国　紀三井寺の御詠歌と同じ。

紀三井山　金剛宝寺　護国院

古里を　はるばるここに　紀三井寺

花の都も　近くなるらん

第三番観音像



☆　西国三十三札所　第三番　紀の国　粉河寺の御詠歌と同じ。

風猛山　粉河寺

父母の　恵みも深き　粉河寺　仏の誓い　頼もしの身や

以下刻文の転載を省略して解読文のみ記す

第四番観音像

みやまちや　ひはらまつはら　わけゆけは

まきのおてらに　こまぞいさめる

☆　西国三十三札所　第四番　和泉の国　槇尾寺の御詠歌と同じ。

槇尾山　施福寺

（深山路や　檜原松原　分け行けば

槇尾の寺に　駒ぞいさめる）

第五番観音像

まいるより　たのみをかくる　ふちゐてら

は□のうてなに　むらさきのくも

☆　西国三十三札所　第五番　河内の国　葛井寺の御詠歌と同じ。

紫雲山　葛井寺

（参るより　頼みをかくる葛（藤）井寺

花の台に　紫の雲）

第六番観音像

いはをたて　みづをたゝへて　つぼさ□の

にはのいさこも　しょうとなるらん

☆　西国三十三札所　第六番　大和の国　壷阪寺の御詠歌と同じ。

壷阪山・南法華寺

（岩を立て　水をたたえて　壷坂の
庭の砂子も　浄土なるらん）

第七番観音像

けさむれハ　つゆおかてらの　にハのこけ
さなからるりの　ひ□りなるらん

☆　西国三十三札所　第七番　大和の国　岡寺の御詠歌と同じ。

東光山　龍蓋寺（岡寺）

（今朝見れば　露岡寺の　庭の苔
さながら瑠璃の　光なりけり）
（刻文は「光なるらん」）

第八番観音像

あなとうと　みちびきたまえ　かんおんじ
とうきくにより　はこぶあゆみを

☆　風化が激しく解読出来ません。

ただ文字の僅かな痕跡から西国三十三札所　第三十二番　近江の国

繖山観音正寺の御詠歌と符号するように思われる。

観音正寺御詠歌

（あな尊うと　導き給え　観音寺
遠き国より　運ぶ歩みを）

なお第八番御詠歌は第十八番観音像の項参照。

第九番観音像

はるの日ハ　なんえんとうに　□□やきて
み□さのやまに　はるゝうすぐも

☆　西国三十三札所　第九番　奈良　南円堂の御詠歌と同じ。

興福寺　南円堂

（春の日は　南円堂に　輝きて
三笠の山に　晴るる薄雲）

第十番観音像

よもすがら　つきをみむろと　□けゆけバ
うちのか□せに　たつ□志らな□

☆　西国三十三札所　第十番　山城の国　三室戸寺の御詠歌と同じ。

明星山　三室戸寺

（夜もすがら　月をみむろ（三室）と　分け行けば
宇治の川瀬に　立つは白浪）

第十一番観音像

きやくえん□　□らさてす□う　く□□なれハ
□□□い□うハ　たの□□きか□

☆　西国三十三札所　第十番　山城の国　上醍醐寺の御詠歌と同じ。

深雪山　上醍醐寺（准胝観音を祀っている）

（逆縁も　もらさで救ふ　願なれば
准胝堂は　頼もしきかな）

第十二番観音像

☆　ハッキリしません。

安房三十三札所　第二十八番　松野尾寺の御詠歌に似た部分がありますが判然としません。参考までに安房の国　松野尾寺の御詠歌は次の通りです。

おもくとも　つみにはのりの　まつのおじ
ほとけをたのむ　みこそたのもし

また西国三十三札所　第十二番　岩間寺の御詠歌は第二十三番参照。

第十三番観音像

のちのよを　ねがうこゝろハ　か□くと□
ほとけのちか□　□□きいしやま

☆　西国三十三札所　第十三番　近江の国　石山寺の御詠歌と同じ。

石光山　石山寺

（後の世を　願ふ心は　軽くとも
仏の誓い　重き石山）

第十四番

□□□□□　な□□のつきハ　□ゐてらの
□ねのひゝきに　□くる□□□□

☆　西国三十三札所　第十四番　近江の国　三井寺の御詠歌と同じ。

長等山　園城寺（三井寺）

（出で入るや　波間の月を　三井寺の
鐘の響きに　明くる湖）
（刻文は「波間の月ハ」となっている）

第十五番、第十六番、第十七番観音像は風化が激しく読みとることが出来ません。

第十八番観音像

いくたび□　まいるこ□ろは　はつせてら
やまもちかい□　ふか□谷川
（「谷川」は漢字で刻されている）

☆　何故か西国三十三札所第八番　奈良　長谷寺の御詠歌が刻されている。
豊山（ぶざん）　長谷寺（ちょうこくじ）
（幾たびも　参る心は　初瀬寺
山も誓ひも　深き谷川）
なお西国三十三札所第十八番頂法寺の御詠歌は次の通りです。
わかおもふ　心のうちは六の角
ただまろかれと　祈るなりけり

第十九番観音像

□□を□て　□ま□の□□□　□□□□の
□□□□くさも　□□□□□□□□

☆　西国三十三札所　第十九番　京　革堂の御詠歌と同じ。
霊鷲山（れいじゅうざん）　行願寺（ぎょうがんじ）（革堂（こうどう））
（花を見て　今は望みも　革堂の
庭の千草も　盛りなるらん）

第二十番観音像

のをもすき　やまちにむこふ　あめの□ら
□□□□よ□も　はる□□□だち

☆　西国三十三札所　第二十番　山城の国　善峰寺の御詠歌と同じ。
西山（せいざん）　善峰寺（よしみねでら）
（野をも過ぎ　山路に向ふ　雨の空
善峰よりも　晴るる夕立）

第二十一番観音像

かゝるよ□　□まれあふ□の　□□□やと
□□□てたのめ　□□□□□□

☆　西国三十三札所　第二十一番　丹波の国　穴太寺の御詠歌と同じ。

菩提山（ぼだいさん）　穴太寺（あのうじ）

（かかる世に　生まれ逢う身の　あな憂（う）や（穴太）と
思はで頼め　十声一声（とこえひとこえ））

第二十二番観音像

おしなへて　た□□いや□き　□□□□の
ほとけのちかい　□□まぬはなし

☆　西国三十三札所　第二十二番　津の国　総持寺の御詠歌と同じ。

補陀洛山（ふだらくさん）　総持寺（そうじじ）

（おしなべて　高き賤しき　総持寺の
仏の誓い　頼まぬはなし）

第二十三番観音像

□な□みハ　いつくな□らん　いわまてら
きしうつな□□　まつかぜの□と

☆　西国三十三札所　第十二番　近江の国　岩間寺の御詠歌と同じ。

岩間山（いわまさん）　正法寺（しょうほうじ）（岩間寺（いわまでら））

（みなかみは　いずくなるらん　岩間寺
岸打つ波は　松風の音）

また第二十三番応頂山　勝尾寺の御詠歌は次の通りです。

重くとも　罪には法の　勝尾寺
仏をたのむ　身こそやすけれ

第二十四番観音像

のおもすき　さとを□すきて　なかやまの
□□へまいるも　のちのよのため

☆　西国三十三札所　第二十四番　津の国　中山寺の御詠歌と同じ。

紫雲山（しうんさん）　中山寺（なかやまでら）

（野をも過ぎ　里をも行きて　中山の
寺へ参るは　後の世のため）

刻文は「里をも過ぎて」となっている）

第二十五番観音像

あ□れ□や　□まねき□どの　しなしな□

□にお□なみの　ここにきよ□づ

☆　西国三十三札所　第二十五番　播磨の国　清水寺の御詠歌と同じ。

御嶽山・清水寺

（あわれみや　普き門の　品々に

何をか無み（波）の　ここに清水）

第二十六番観音像

はるハはな　□つ□たち□□　あき□きく

いつもたへ□□　のりの□なやま

☆　西国三十三札所　第二十六番　播磨の国　一乗寺の御詠歌と同じ。

法華山　一乗寺

（春は花　夏は橘　秋は菊　いつも妙なる　法の華山）

第二十七番観音像

□□□□と　のほれ□□やの　やまおろし

まつのひゞき□　みのりな□らん

☆　西国三十三札所　第二十七番　播磨の国　円教寺の御詠歌と同じ。

書写山　円教寺

（はるばると　登れば書写の山風

松の響きも　御法なるらん）

第二十八番観音像

な□の□と　まつのひゝきも　□り□ひの

□せふき□□□　あま□はしだて

☆　西国三十三札所　第二十八番　丹後の国　成相寺の御詠歌と同じ。

成相山　成相寺

（波の音　松の響きも　鳴り合ひ（成相）の

風吹き渡す　天橋立）

第二十九番観音像

そ□□□を　いくよへぬらん　たより□□

ちとせをこゝ□　□□のをのてら

☆　西国三十三札所　第二十九番　丹後の国　松尾寺の御詠歌と同じ。

青葉山　松尾寺

（そのかみは　幾世経ぬらん　便りをば

千歳もここに　待つ（松）の尾の寺）

刻文は「そのかみを」となっている）

第三十番観音像

つき□ひ□　なみまにうかぶ　ちくふしま

ふねに□□□を　つむこゝちして

☆　西国三十三札所　第三十番　近江の国　宝厳寺の御詠歌と同じ。

厳金山（がんこんざん）　宝厳寺（ほうごんじ）

（月も日も　波間に浮かぶ　竹生島

舟に宝を　積む心地して）

第三十一番観音像

やちとせや　□きに□□□　いのちてら

□こふあ□みの　□さしなるらん

☆　西国三十三札所　第三十一番　近江の国　長命寺の御詠歌と同じ。

姨綺耶山（いきやさん）　長命寺（ちょうめいじ）

（八千年（やちとせ）や　柳に長き　命寺

運ぶ歩みの　かざしなるらん）

第三十二番観音像

☆　解読できません。

参考；　西国三十三札所　第三十二番　近江の国　繖山（きぬがさやま）　観音正寺の御詠歌は次の通りです。

あなとうと　みちびきたまえ　かんのんじ

とおきくにより　はこぶあゆみを

（あな尊うと　導きたまえ　観音寺

遠き国より　運ぶ歩みを）

第八番観音像に同じ御詠歌が刻されている様に思われるので第三十二番台座には別の御詠歌が刻されていた可能性が高い。

第三十三番観音像

☆　解読できません。

参考；西国三十三札所　第三十三番　美濃の国　谷汲山（たにくみざん）　華厳寺（けごんじ）御詠歌は次の通りです。

いままでは　おやとたのみし　おいずるを

ぬぎておさむる　みののたにくみ

（今までは　親と頼みし　笈摺を

脱ぎて納むる　美濃の谷汲）

またこの寺には次の大悲殿の御詠もある。

大悲殿

世を照らす　仏のしるし　ありければ

・　・　未だともし火も　消えぬなりけり

尊像を寄進した人々の御名前（□は判読出来ない）

第一番　不明　第十五番　不明
第二番　村　藤吉　第十六番　不明
第三番　村　直右ヱ門　第十七番　不明
第四番　村　□こま　第十八番　村　傳右ヱ門
第五番　村　吉　第十九番　不明
第六番　村　於ふく　於いよ　第二十番　村　兵吉　お□た
第七番　村　元右ヱ　第二十一番　赤松　利兵ヱ
第八番　村　利□門　第二十二番　村　徳右ヱ門　猪太良
第九番　村　八十吉　第二十三番　柳　おとさ
第十番　後迫　おうた　第二十四番　村　おうめ
第十一番　村　米吉　第二十五番　村　十吉
第十二番　村　初三良　□と□　第二十六番　平原　弁右ヱ門
第十三番　村　岩蔵　第二十七番　林　定吉　おぬい
第十四番　□　□良　第二十八番　柳　歌吉
第二十九番　村　源蔵　大蔵　第三十二番　村　おりん
第三十番　内成　三良右ヱ門　第三十三番　村　栄右ヱ門
第三十一番　赤松中

寄進者一覧で気づいたこと

一、林村、後迫村という現在消えている村名があること。
何処にあったか今の内に特定しておきたい。
平原村は鳥越地区内にあり、同地区内の穴守村同様に行政上はきえている。（「穴守」という地名はタタラ地名＝富来隆著書による）

二、右ヱ門さんが多数いること。

三、隠山部落以外の近在の村人が寄進していること。

四、女性の寄進者が多数いること。たぶん後家さんであろうと思われるがご苦労が偲ばれる。

あとがき

昭和五十七年三月三十一日付「内成、隠山総合調査報告書」（別府市文化財調査委員会）で隠山部落の伝説、史跡等を調査した結果「室町時代にはすでに寺院（法華寺、山王社）を中心にして生活が営まれていたものの如く当代の遺物が残さ

れている。」として宝きょう印塔や五輪塔などが報告されているが、三十三体観音像についての記載がないのが何とも不思議である。なお隠山部落の開村時期は詳らかでないとしている。

観音像は村人によって良く管理されているが、台座部分は一部砂に埋もれ苔むして文字の存在は分かっていても放置されていた。長い年月風雨に晒されてひび割れが刻文と重なっていたり、摩耗して判読出来ない文字も相当数あったが、西国三十三札所の御詠歌であることが分りわりと簡単に解読できた。

三十三体観音像台座文が和歌ではなく御詠歌であることを地元民は知っていたものの、御詠歌の内容や歴史年代については認識は薄かったようで、この調査解読を機に、三十三体観音像が文化財資源または観光資源として見直される契機となり、地元のお役に立つならば嬉しい限りである。

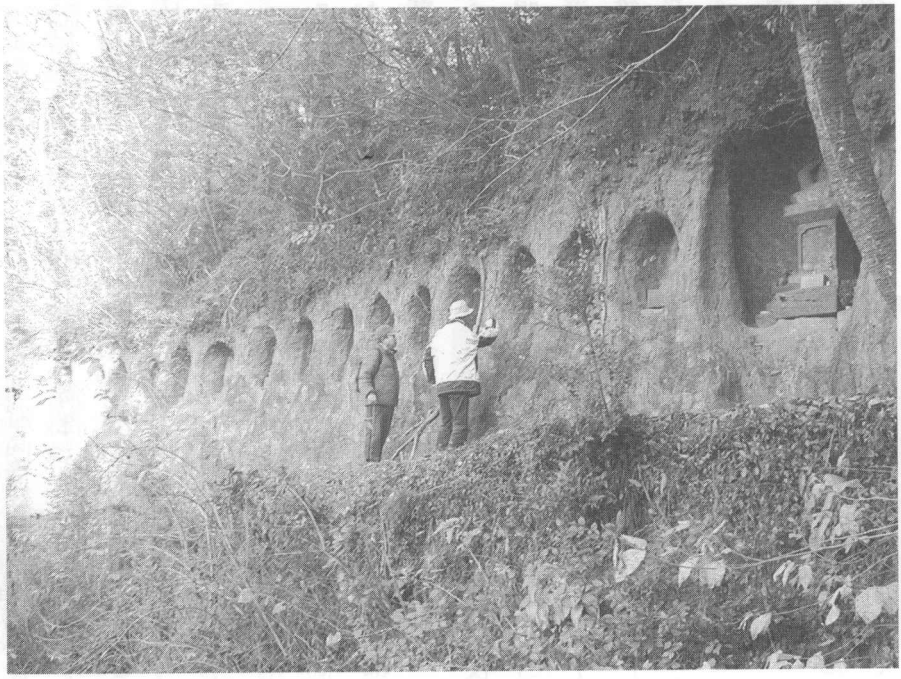
参考文献

御詠歌の旅―西国三十三札所をめぐる―　和田　嘉寿男　著

巡礼と御詠歌　清水谷　孝尚　著

九州西国観音巡礼　近藤　弘訓（宝満寺住職）著

内成隠山総合調査報告書　別府市文化財調査委員会



三十三体観音像の祠